

令和6年6月の研究会の曲目について

今回は「源氏物語の世界」として特集を組みましたが、物語のコンテンツは皆様には先刻ご承知のことと思いますので、掲出曲目の性格と技法（ワンポイント）に絞って愚見を記してみます。

この度、意図したことは、同じように見える曲でも実はそれぞれの特徴があって、そのことを追及し、謡の表現を工夫する機会を持つことも大切なことであると訴えたかったのです。例えば、玉鬘と浮舟は四番目・略三番目で、後場に翔があるが、どこが違うのか。夕顔、誓願寺、野宮は典型的な三番目で序之舞ものであるが、どこが違うのか。

1. 玉鬘

性格＝前シテは紅無し、翔があって、キリは修羅ノリというところは浮舟と同じであるが、こちらの方は、クリ、サシ、クセ、ロンギと典型的なプロセスを踏みながら、後シテの性格を紹介しているので、後場はすんなりと盛り上げていける。

技法＝五丁の裏1行「御跡をよく・・・」、松風と本曲にある特殊な節扱い・・・。御の「ん」と、よく吊いの「く」の崩しを同じ音程で謡うのは難しいところ。

2. 浮舟

性格＝前シテは紅なし、キリは修羅ノリ、と玉鬘と形式上は似ているが、後者に比べると、おっとり感が否めない。ドラマ性に乏しく情緒的である。

物語によると、二人の男性を愛し（いや愛されて）、川に身を投げるが、怪物に誘われて蘇り、さらに僧侶に出合って出家して安堵の境地に達する運命に翻弄されるひ弱とも言える女性が主人公。

技法＝前シテの、一セイ、二ノ句、サシ謡の使い分け。後シテは、2行謡った後、3行目からの謡をどう変えていくのか、個人差が出てきそうです。

キリの地謡は、玉鬘に比べるとかなり穏やかです。

3. 夕顔

性格＝一言で言えば、全曲を通じて極めて優雅で、重厚な鬘物といえる。物語としても大きな起伏、波乱はなく、その代わり、曲付けが美しいので、その美しさを謡い上げなくてはならない。地頭の力量も問われる。

技法＝難しい節扱いはなく、ひたすら綺麗な謡を心がけたい。そうになると、発音が大切、例えば、前シテの謡い出し「山の端の・・・」の「や」、「心も知らで・・・」の「こ」など。もう一つ、八丁裏の最後の行から次の行にかけて「入」が三か所あるが、この使い分けを正確にして欲しい。

4. 誓願寺

性格＝和泉式部は、紫式部（970～1014）の7歳年下で同じ中宮彰子の女官。二人は、宮中の儀式や、職員の人事を属の同僚でした。インテリ女性でなくては務まらない役職についていました。

源氏物語とは直接の関係のないこの曲を選んだのは、私にとって、この曲は柔吟ものの最高峰に位置していると認識している故です。

和泉式部は恋多き人とされていますが、この曲に限り、清澄そのもの信心深い女性で、堂々たる風格です。

技法＝十丁表三行目の「二十五の・・・」と同じ十一丁表六行目の「ありがたさよ」の振り引きの謡い分け、それと、十一丁裏の三行目、「御法の・・・」の箇所での2種類の入り廻しの謡い分け。

5. 葵上

性格＝悲しいまでに「女の性（さが）」が出ている悲劇だと理解しています。

シテは高貴な位置にありながら、嫉妬の情念は抑制が効かない。その撞着の心が悲しい。故に、奔放に謡うのではなく抑制的に謡うのが正しいと思うけれど如何だろうか。

技法＝「三つの車・・・」と謡い出した途端に、謡う人が、シテをどのように考えているかわかってしまう。この曲に限らず、謡い出しのいかに大切なことか。

二丁裏の最後の行、「怨霊の・・・」となると、その謡で謡い手の力量、哲学まで分かってしまうから恐ろしい。

また、この曲のツレは例外的に大事な役割で、それ故に節付けも技術的に難しい。

6. 須磨源氏

性格＝早舞があり、キリの謡やシテの佇まいの共通性から「融」との近似点を挙げる事ができるが、ドラマ性は希薄。その分、高貴さを前後ともに表現すべきなのでしょう。何しろ、光源氏が菩薩として化現するのだから。

技法＝二丁裏のシテのサシ謡。忠度や箴のように柔、剛のまだら謡だが、剛の中音は柔のウキ音であることを意識してください。また、六丁裏三行目「うつつに・・・」はその前が中音になっているので、下の中（低い音）であることに注意して欲しい。

ついでながら「若木の桜」は固有名詞であることをお忘れなく。

以上